

「ガザの虐殺を怒る」

2018年05月22日

米国のトランプ大統領はエルサレムをイスラエルの首都と認め、米大使館をエルサレムに移転させた。これに反発したパレスチナ自治区ガザで起こった大規模な抗議デモに対し、イスラエル軍は催涙弾を撃ち、銃撃し、60人以上の死者と2,700人を超える負傷者が出た。イスラエル軍の虐殺行為は断じて、赦されることではない。

イスラエルは紀元70年にローマ軍によって滅亡させられ、国を失い、ユダヤ人は世界を流浪した。第二次大戦後の1948年、建国宣言をし、国家を樹立した。1900年もの間、民族のアイデンティティを守り、国家を再建したユダヤ人の執念には驚くが、戦後の世界の政治力学が、それを可能にしたのである。エルサレムには、ユダヤ教の「嘆きの壁」があり、その上にはイスラム教の「黄金のドーム」、更に、主イエスを埋葬したと言われるキリスト教の「聖墳墓教会」もある。三大宗教の「聖地」とされている。

イスラエルの建国によって、先住のパレスチナ人との苛烈な戦いが展開された。「二つの民の共存」が求められたが、米国で強力な力を持つユダヤ人ロビーがイスラエルを支援し、圧倒的な軍事力でパレスチナ人を圧迫する体制を作り上げ、周りのアラブ諸国も抑え込んでいった。パレスチナ人は抵抗「インティファダ」として石を投げるなどの抗議をしているのに対し、イスラエルは強力なミサイル攻撃などを行い、パレスチナ人の死者は数十万人に及ぶのではないかと。彼らは「壁」で阻まれ、生存権も奪われ、将来に対する希望を失っている状態にある。世界の世論はイスラエルに批判的である。

私はイスラエル旅行に行った時、パレスチナ人教会を訪ねたいと思った。ベツレヘムのルター派の教会を訪ねることができた。『私はパレスチナ人クリスチャン』を著したミトリ・ラヘブ牧師に会い、2千年来、キリスト教を生き抜いてきた、彼らパレスチナ人クリスチャンの自負と誇りを聞いた。パレスチナ人の居住区のインフラはユダヤ人とは全く違う。道路は狭く、信号機も十分になく、大型バスは入れず、小型バスに乗り換えた。ラヘブ牧師の教会もイスラエル軍の攻撃を受けたようだ。彼が来日した時、講演を聞きに行き、攻撃で破損したガラスで作った「天使像」を買い求めた。

イスラエルはエルサレムを首都と主張している。パレスチナ人も将来、エルサレムを首都にしたいと願っている。両者の衝突は「中東の火薬庫」になると危ぶまれ、国連が管轄する「永久信託統治」とされている。それを、米国のトランプは「首都」として大使館を置いたのだから、パレスチナ人の怒りは想像できる。トランプは、イラン核合意を一方向的に破棄し、イランを抑え込もうとしているが、それはイスラエルの望むところである。エルサレムを首都と認めることはトランプの選挙公約であった。この公約は、米国の福音派と言われる保守的キリスト教会の支持を取りつけるためのものであった。福音派は、創世記でアブラハムにパレスチナの土地を与えると約束したことを信じ、土地はイスラエル人のものであると信じる原理主義である。国際法的に首肯できることではない。

トランプのイラン核合意離脱も大使館をエルサレムに移転する政策も、平和とは真逆で、徒に緊張を高めるだけである。彼は「アメリカファースト」を繰り返しているが、中間選挙で、自分の権力を維持するための「自分ファースト」ではないか。安倍晋三首相がトランプに追従することに深い危惧を抱いている。ラヘブ牧師は、「私には、壁で分けられることのない二つの民という夢がある。…二つの民に必要なのは、平和、すなわち現実的で正当で真実の平和である」と書いている。